

日本語会話における対称詞

—ポライトネス理論からの検討—

高橋 圭子

1. 問題提起

会話の相手を表すことばを総称して「対称詞」という。日本語の場合、対称詞には、「あなた」「きみ」「おまえ」のような所謂「二人称代名詞」のほか、「姓」や「名」、また、「おかあさん」「先生」「課長」のような「地位・資格名称」などさまざまな形式があり、その選択は話し手と相手の上下関係に基づいている（鈴木孝夫1973など）。

従来、日本語の対称詞研究は、上下・親疎・性別などの要因による形式のvariation調査が殆どであった。しかし、自然談話資料を観察すると、対称詞の使用には、形式の選択にとどまらない興味深い問題があることに気づく。

具体的にデータを示す。【表1】は、大学院生M(20代・女性)を中心とした5種類の会話資料（いずれも、約30分間・1対1の対面会話）における、対称詞の使用をまとめたものである¹。

【表1】

会話の相手		対称詞数			対称詞の形式
		呼	言	計	
①友人 f 20代	M→K 同等	1	0	1	名+ちゃん
	K→M 同等	0	3	3	名略+ちゃん
②友人 f 20代	M→B 同等	0	4	4	名略
	B→M 同等	0	0	0	—
③後輩 f 20代	M上→Z下	1	3	4	姓+さん
	Z下→M上	2	5	7	姓+さん
④教官 f 40代	M下→J上	39	7	46	先生
	J上→M下	0	3	3	姓+さん
⑤教官 m 40代	M下→Y上	24	7	31	先生
	Y上→M下	0	0	0	—

m=男性 f=女性 呼=呼びかけ用法 言=言及用法

このデータによれば、対称詞は、上下の距離が大きい場合、下位者から上位者に対し呼びかけ用法として多用される傾向にあるようである。とすれば、その使用の機能は何なのだろうか。「呼びかけ」の主たる機能は、相手の注意を喚起し、会話の場面を成立させることにある。では、1対1の会話がすでに成立している中での呼びかけは、どのような機能を持つがゆえにこのような使用傾向を示すのだろうか。また、その機能とは対称詞全般の特徴なのか、あるいは「先生」という形式独自のものなのだろうか。

本稿は、以上のような問いに対し、考察を試みるものである。

2. 理論的枠組み

対称詞の使用のダイナミズムを捉える枠組みとして、本稿は、Brown and Levinson (1987) (以下B&Lとする)による「ポライトネス理論」を用いることとする。この理論では、対称詞による呼びかけは「FTA補償ストラテジー」²の一部とされている。すなわち、「愛称 nicknames」などによる呼びかけは“Positive Politeness”の「Strategy 4: 仲間であることを示すマーカを使う」に、“Sir” “Madam”などの「敬称 honorifics」による呼びかけは“Negative Politeness”の「Strategy 5: 敬意を払う」に、それぞれ含まれているのである。次の(1)は前者、(2)は後者の例である。

(1) Come here, *mate / honey / buddy*. (p108)

(2) Excuse me, *sir*, but would you mind if I close the window? (p183)

B&Lのこの枠組みをあてはめると、日本語における「先生」という呼びかけも“negative politeness strategy”であることになる。この説明の妥当性を、実際のデータから検討する。

3. 分析

3.1 資料・方法

自然談話資料から得られた「先生」という呼びかけ計101例を対象として、

B & L の枠組みに基づき、分析を行なうこととする。

【表 2】は、資料の概略である³。「頻度」の項は、会話30分あたりの「先生」という呼びかけの平均回数、また、「話者」の項の同じ記号は同一人物を示している。

【表 2】

資料	下→上		上→下		時間	頻度	話者			
	呼	言	呼	言			下(学生)		上(教員)	
A	25	13	0	4	8時間	1.6	A	大学4年 f 教育実習生	T	40代 m 高校教員
B	4	3	0	0	30分	4	B	高3 f	T	40代 m
C	2	0	1	0	30分	2	C	高3 f	T	40代 m
D	4	7	0	0	45分	2.7	D	高2 m	T	40代 m
E	3	1	1	3	45分	2	E	40代 f 院生	J	40代 f
F	39	7	0	3	30分	39	M	20代 f 院生	J	40代 f
G	24	7	0	0	30分	24	M	20代 f 院生	Y	40代 m
計	101	38	2	10	11.5時間	4.4				

3.2 Negative Politeness Strategy

まず、「先生」という呼びかけが B & L の説明通り “negative politeness strategy” として機能している例をあげる。但し、以下に示す F T A は、分析対象に現れたもののみである⁴。

a) 命令・依頼など … 8例

〈資料 A〉 A 先生赤、赤ペン貸してください／

b) 相手への評価・言及⁵ … 11例

〈資料 A・卒論に対する T の助言に〉

A 先生いいアドバイスですよ／ちょっとこれはもう／買いですね 〈笑〉／

c) 相手への否定・反論・不満など … 11例

〈資料 D・某3年生の受験勉強のやり方について〉

T でもねー／**大／ぐらいだったら受かっちゃうかもなー／

D あーなんか／

T しゃくだなー／

D 〈笑〉えしゃくですか先生／

d) 個人的情報の要求 … 2例

〈資料B〉

- T でもな—／う—んそろそろ子供がほしかったりして／
B 先生もういくつ↑／

e) 非礼・無礼・なれなれしい言葉遣い … 1例

〈資料A〉

- A あとさ—／
T ん↑／
A 〈笑〉あとさ—先生あとですね—／労働組合と—そのなんか／

f) 遮り・割り込み … 7例

〈資料F・「ジャイアンツがヤクルトに勝った」という文のフォーカス〉

- J で／勝ったっていうことを{述べて終}わってしまえば／
M {あ先生}
J 語順が変わって次が落ちてもいいから／
M はいはい／

g) 話題の導入・展開 … 33例

〈資料G・英語の完了形についての質問〉

- M ここがポイントですね／
Y ここがポイントです／だまされるなど／
M はい／あそれと先生もう一つ聞いていいですか／

複数のF T Aが重なっているものもあり⁶⁾、B & Lの説明通り“negative politeness strategy”として機能しているものは計67例になる。

3.3 Positive Politeness Strategy

分析対象のうち、残る34例の現れる発話は、次のように大別できる。

いずれにおいても、「先生」という呼びかけは話し手と相手の距離を短縮し、親愛感の促進や会話の進行に寄与する機能を果たしている。

h) 共感・理解 … 9例

話し手から相手に歩み寄る内容の発話である。「先生」という呼びかけもその心的距離の短縮に貢献している。

〈資料A・TのNYでの体験談を聞き、Aは旅行時期について尋ねる〉

T うんだから／秋口がいいんじゃない↑／

A ふーん／

T あの一／だから／ぼくは8月しか行ったことないけど／8月の終わりの頃になるとき／天気すごくいい時とか気持ちいいよ／

A へえーそんな先生もう行きたくてしょうがなくなってきました〈笑〉／

〈資料G・英語の完了形についての質問〉

Y あそれは継続ですよ／でも大過去じゃないでしょう／

M 継続ですか／

Y だって／あの一／visited／

M あーそうかそうか／わかった先生意味が／

Y そうでしょう／

i) 巻き込み・訴え … 9例

これも、話し手と相手の心的距離の短縮を図る発話であるが、方向として相手を話し手の方に引き寄せよう・巻き込もうとの訴えかけである⁷。次は、「よね」との同意要求に、話し手のこの姿勢が示されている例である。

〈資料G・英語の完了形についての質問〉

M やっぱり継続ですよ先生／

j) 交話的発話 … 8例

円滑な人間関係の維持・強化を図る発話である。

「ありがとうございました先生」のような謝礼の発話⁸、また、次に示す例のように謝礼やほめを否定して相手の負荷を軽減しようとする発話が各4例ある。

〈資料A・録音協力のお礼のクッキーをTがAに渡す〉

T まずあのこれ／あのテープとらせてもらったんでうちのワイフから／

A えそんな先生わたしあんなはな鼻声／

〈資料F・Mの研究計画について〉

J でも本当Mさんのこのエネルギーにね／

M や先生ちょっと／全然エネルギーないんですよいま先生／

k) 場つなぎ … 8例

会話の中断を防ぎ回路を維持しておく、フィラーとしての機能である。

〈資料G〉

Y 過去になる / {その現在形###}

M {はいわかりますわかります}

Y うん /

M 先生 /

Y うん /

〈間〉

M 先生 / えっと {ー}

Y {だから} 普通大過去って高校で教えてるのは /

3.4 結果

以上の分析に基づき、それぞれの用例数をまとめたものが【表3】である。

【表3】

* = 重なりを含む

資料	計	Negative politeness strategy								Positive pol. str.				
		a	b	c	d	e	f	g	計	h	i	j	k	計
A	25	2	7*	1		1	3*	8*	20	1	3	1		5
B	4		3		1				4					
C	2							2	2					
D	4			1				3	4					
E	3	2*						2*	2		1			1
F	39	3	1	4*	1		2	10*	20	3	3	7	6	19
G	24	1		5*			2*	8	15	5	2		2	9
計	101	8*	11*	11*	2	1	7*	33*	67	9	9	8	8	34

ここから、日本語における「先生」という呼びかけは、B&Lの説明通り“negative politeness”である例の他に、“positive politeness”の機能を果たす例も少なくないこと、また、資料F・Gにおける話者Mの使用頻度の高さはむしろ“positive politeness”としての用法に由来するものであること等が明らかになった。それぞれの談話資料における、雑談への逸脱やスピーチ・レベルのダウン・シフト、笑いなど、他の positive politeness strategiesとの関連の詳細な分析は、今後の課題の一つである。

4. 考 察

以上の分析結果を踏まえ、次のような課題について考察する。

- (3) 「先生」という呼びかけが “positive politeness” である場合、その補償する F T A とは何か。
- (4) 「先生」という呼びかけが negative / positive 両方の機能を持つのはなぜか。

(4)は、「先生」という対称詞の使用頻度の高さとも関連するだろう⁹。この呼称は、教員・医師・弁護士・政治家・作家などに対して用いられるが、その共通項は、年齢や地位といった要素よりむしろ、専門性やそれに由来する恩恵・権限を与え得る立場によって上位に待遇される存在、とまとめられる(菊地1997:54-55)。つまり、「先生」という対称詞は、敬称という点では “negative politeness” だが、その恩顧を得ようとする点で距離の短縮を図る “positive politeness” として機能するのではないかと考えられる。今後、さらに検討を重ねたい。

(3)については、ポライトネス・ストラテジーを、文・命題レベルからの他、談話全体における頻度から捉えようとする考え方がある。例えば、宇佐美(1997:248-249)は、会話促進機能の「ね」を positive politeness であると捉え、談話全体として概ね同じような考えだということを話者が互いに確認しあっているものが個々の命題についての同意より多いと指摘している。また、B & L (pp109-110)においても、親密な呼称の多用が、呼びかけを超え、会話全体の雰囲気共感的・親愛的なものにする、つまり positive politeness の機能を有する例があげられている。

このような見方は、B & L 自身、「ネガティブ・ポライトネスとは異なり、ポジティブ・ポライトネスは F T A によって侵害される特定のフェイスの補償とは限らない；つまり、ネガティブ・ポライトネスの補償する範囲は負荷そのものに限定されるが、ポジティブ・ポライトネスの補償する範囲は広い。」(p101、引用者訳)と述べていることから裏付けられる。

では、negative / positive 両ストラテジーのこのような相違は、何に由

来するのだろうか。ネガティブ・ポライトネスにも、談話レベルで捉え得る面があるのではないだろうか。これについて、「先生」という呼びかけの過度な多用が与える印象を調査した。結果は現在集計中だが、「よそよそしさ」「なれなれしさ」ともに強く感じるとの回答が多数を占める傾向にある。

5. まとめと課題

以上の考察に基づき、本研究の指摘は、次のようにまとめられる。

- (5) 「先生」という対称詞による呼びかけは、negative politenessとしてみならず、positive politenessとして機能する例もある。
 - (6) negative / positive両ストラテジーとも、文・発話レベルの他に、談話レベルにおいても、その機能を捉える必要がある。
- 「先生」以外の対称詞の機能、他のポライトネス・ストラテジーとの関わり、ことばの諸機能における位置付けなど、今後の検討課題である。

●本稿は、1999年12月、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻に提出予定の修士論文の一部である。

●文字化の記号

/	ポーズ	{ }	重なり
###	聞き取り不能	↑	上昇イントネーション

注

- 1 林(1997)の談話資料に拠る。
- 2 「FTA: Face Threatening Act」とは、人間の基本的欲求である「フェイスface」を脅かす行為であり、それを補償するストラテジーの中に、自分の領域を他者に侵害されたくないという“negative face want”に訴える“negative politeness strategy”や、自分を他者に是認・評価・理解してもらいたいという“positive face want”に訴える“positive politeness strategy”などがある。
- 3 資料Aは、約2週間の教育実習指導の会話である。また、資料F・Gはそれぞれ、【表1】で示した林(1997)の資料④・⑤と同じものである。

- 4 B & L (1987:65-68) に基づき、部分的に修正を加えてある。
- 5 相手への言及はその領域に踏込むことであるため F T A と考えられる。日本語の場合、たとえプラスの「ほめ」であっても、下位者が上位者を評価することは不適切であるためである(鈴木睦1989:66、蒲谷他1998:218-220など)。
- 6 重なりは、a・g 2例(ともに資料E)、b・f 1例(資料A)、c・f 1例(資料G)、c・g 1例(資料F)、f・g 1例(資料A)の計6例である。
- 7 尾上(1975:74)は、「自己の状況に相手の注意をひきつけよう、求めようという呼びかけ」を〈訴え〉と呼び、「当然、自己の状況についてのあたたかい理解、同情と、場合によってはそれに引き続く好意的な行為(中略)とかを期待するもので、〈訴え〉は常に“甘え”の要素を含む」と述べている。
- 8 B & Lは謝礼も F T A であるとするが、これに対しては異論も多い。
- 9 小林(1997:134)などにも、「先生」という形式が他より多用される傾向にあるとの指摘がある。

引用文献

- 宇佐美まゆみ1997『「ね」のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス』現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』ひつじ書房
- 尾上圭介1975「呼びかけの実現：言表の対他的意志の分類」『国語と国文学』52-12
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵1998『敬語表現』大修館書店
- 菊地康人1994/1997『敬語』角川書店/講談社学術文庫
- 小林美恵子1997「自称・対称は中性化するか？」現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』ひつじ書房
- 鈴木孝夫1973『ことばと文化』岩波書店
- 鈴木 睦1989「聞き手の私的領域と丁寧表現」『日本語学』8-2
- 林 淑璋1997『会話分析と談話標識：「で」「だから」「でも」を手がかりに』東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻修士論文
- Brown, P. and Levinson, S C. 1987. *Politeness: some universals in language usage*. Cambridge University Press.